サンビオティック農業で大豊作！

アスパラガス　栽培基準

◆定植年（1年目）◆

ステージ	内容	商品名	10a施用量・倍率	施用方法	備　考
	播種	鈴成	育苗培土に対して 5～10%混和		肥料成分の含まれている培土の場合でも、鈴成を混和することにより、病気に強い苗を作ります。
	育苗	菌力アップ	200倍希釈	7日おきに潅水	菌力アップにより発根促進を図ります。
定植2～3か月前	土づくり	完熟堆肥 有機石灰、又は 転炉スラグ肥料 菌力アップ	5トン／10cm耕深 200～400kg 10リットル×2回	土壌混和 土壌混和 全面散布	堆肥は、植物性原料が多く、C/N比（窒素炭素率）が15～25程度のものが望ましい。耕起深度10cm当たり最低5トンを目安に施用する。（深耕30cmの場合15トン）ただし、最初から深耕しないこと。（下記参考のこと） 未熟堆肥やノコクズ入り堆肥（木質チップ）しか入手できない場合は、定植の半年前には堆肥を準備し、菌力アップ200倍を散布して3～4か月堆積しておく。 あらかじめ圃場の土壌分析を行い、pHやカルシウム、苦土、および微量要素の含有量を検査しておく。
		（土づくりアドバイス） ①アスパラは、非常に深い作土が必要であるため、排水性が良く、また暗渠排水のある圃場で、最低でも3年以上、アスパラを作付けしていない圃場を使用します。 ②地力のある圃場を作るため大量の堆肥を使用しますが、これが未熟堆肥である場合のリスクを減らすため、定植の2～3か月前には十分な量の堆肥を散布し、菌力アップ10L（200倍希釈）を堆肥の上に散布し、10cm程度耕します。 ③その2週間後に、再度菌力アップ10L（200倍希釈）を同様に散布し、15～20cm程度深耕します。 ④そのまま1～2か月程度放置したのち、有機石灰またはスラグ肥料にてpH6.5～7.0になる量を散布し、30～40cm深耕します。 ※転炉スラグ肥料は、微量要素などミネラル豊富でお勧めです。			
定植前1か月	元肥	有機百倍 鈴成 水酸化マグネシウム	10袋 10袋 15～20kg	土壌混和	有機百倍は、マッスルモンスターでもよい。 く溶性苦土（マグネシウム）肥料を、苦土成分10kg/10a程度施用すると良い。 改植の場合は、土壌分析に基づき施肥量は加減する。
定植後	生長促進	菌力アップ	5リットル	200倍希釈で潅水 7日おき4回以上	アスパラの元肥は、堆肥や肥料が他の作物より多いため、塩類障害になりがちです。菌力アップが、根を守り発根促進しますので、定植後は特に重要です。
生長期	追肥	有機百倍	1～2袋	土壌散布	生育、時期に応じて。
	生長促進	菌力アップ 糖力アップ	5リットル 5kg	200倍希釈で潅水 7日おき4回以上	糖力アップを加えることで、さらに生長促進します。特に春植えの場合は、夏の高温期に体力を消耗しやすいため、夏場の糖力アップが有効です。猛暑が続く場合は、市販のクエン酸を2000倍希釈を、別途潅水し、体力消耗を防ぐ。 水分を切らさないよう、水管理に注意します。
病害虫発生時	土壌病害の対応	菌力アップ 本気Ca（マジカル）	10リットル 2kg	潅水（水1トン） 5日おき4回以上	立枯病、株腐病、茎枯病は、必ず初期症状で発見し対応する。殺菌剤等を使用したのち、菌力アップ、本気Caで病害の蔓延・拡大のリスクに対応する。
	茎葉病害、虫害の対応	本気Ca（マジカル） コーソゴールド マジ鉄	1kg 3kg 200g	潅水（水1～2トン） 5日おき4回程度	葉面散布でも良いです。その場合は、本気Ca（マジカル）は2000倍希釈、コーソゴールドは500倍希釈、マジ鉄は5000倍希釈。細胞壁や繊維を強化し、光合成や免疫の活性を高め、耐病性を高めます。
刈り取り1～2か月前	貯蔵根発達	コーソゴールド 本気Ca（マジカル）	500倍希釈 2000倍希釈	潅水または葉面散布 5日おき4回	リン酸、カリ、カルシウムを施用し、貯蔵根の発達を促します。 貯蔵根の糖度はBRIX20～25度を目指します。

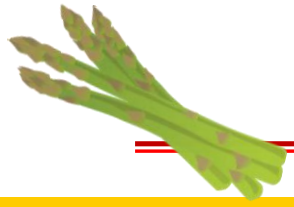
※地域、作型によって、時期が異なると思いますので、生育ステージで判断してください。

※可能であれば、土壌診断を実施し、データに基づいて施肥設計を行うことをお勧めします。

※品種や土壌条件等によって、施肥量は加減してください。

※（2年目以降）は、裏面（2枚目）へ続く

［ver.202102］



サンビオティック農業で大豊作！

アスパラガス　栽培基準

◆（2年目以降）◆

時期	ステージ	商品名	10a施用量・倍率	施用方法	備　考
1月	土づくり	バーク堆肥等 有機石灰、又は 転炉スラグ肥料 菌力アップ	3～4トン 100～200kg 5リットル	土壌混和 土壌混和 潅水	良質なバーク堆肥や牛糞堆肥等を3～4トンを施用し、その上から菌力アップを潅水する。 あらかじめ圃場の土壌分析を行い、pHやEC、カルシウム、苦土、および微量要素の含有量を分析しておくと良い。
		（土づくりのポイント） ・アスパラ栽培は、多堆肥、多肥料栽培のため、低pH、高ECとなりやすい。月に1度程度は、pH、ECを計測し、基準内になるか、改善する点はないか確認することが重要。 ・pHは、6.0～6.5を目標とし、低い場合は、有機石灰または転炉スラグ肥料を施用する。 ・アスパラは高ECに比較的強いが、ECが高くなると収量は大きく減少する。ECは0.6mS/cm以下を目指し、1.0mS/cm以上では要注意レベルである。ECが高い場合は、窒素施肥量を減らす、もみ殻などのC/Nの高い有機物の施用、菌力アップの施用、潅水量を増やす、などの対策がある。 ・バーク堆肥や牛糞堆肥は、10トン程度まで施用可能であるが、塩類濃度が高いものが多く、圃場のECを高めてしまうことがある。そのため、大量に施用する場合は、ECの低い堆肥を使用する。または、牛糞堆肥にもみ殻を3～4割混ぜて使用するのも良い。堆肥が多いほど、土壌団粒が促進され、収量が上がる傾向がある。 ・通路には、もみ殻などの有機物を数センチ程度敷きつめ有機物マルチする。これにより、通路の団粒化が促進され、水たまりができにくくなる。潅水も通路部分に水が入るようにすると、通路部分まで根が張り出し、根域が広がり、収量があがる。 ・アスパラ栽培では、水管理が収量アップの最大のポイントとなる。潅水チューブは、圃場全体にムラなく散水できることを確認する。圃場には、必ずpFメーターを設置し、天気や季節による水分量の変化を確認できるようにしておくとよい。 ・潅水に使用する水質は、pHだけでも確認し、6.8以上や6.0以下では、適切な中和策を検討する。			
	春肥	有機百倍 鈴成 水酸化マグネシウム	2～3袋 5袋 10kg	土壌混和	有機百倍は、マッスルモンスターでもよい。 く溶性苦土（マグネシウム）肥料は、土壌pHが6.5以上ある場合は、硫酸マグネシウムに変更する。 十分に潅水し、加温開始する。
2～3月	春芽	菌力アップ 糖力アップ 本気Ca（マジカル）	5リットル 5kg 2kg	潅水（水1トン） 5日おきに継続	根の消耗を抑えつつ、萌芽を促進します。アスパラは、カルシウムの要求量が多い作物なので、本気Caを継続施用します。
4月	立茎	有機百倍 鈴成 水酸化マグネシウム	5～6袋 5袋 10kg	土壌散布	有機百倍は、マッスルモンスターでもよい。 く溶性苦土（マグネシウム）肥料は、土壌pHが6.5以上ある場合は、硫酸マグネシウムに変更する。
5～10月 収穫期	追肥	有機百倍 ※8月下旬に1回 鈴成	1～2袋 5袋	土壌散布	有機百倍は、20日～30日おきに追肥する。 また、8月下旬ごろには鈴成5袋を追肥し、徐々に生殖生長型（貯蔵根の発達）に転換していく。ただし、リン酸過剰圃場では、鈴成の施用は省略する。
	生長促進 収量アップ 疲労回復	菌力アップ 糖力アップ 本気Ca（マジカル）	5リットル 5kg 2kg	潅水（水1トン） 7日おき収穫期は継続	生長促進し収量を向上します。夏の高温期には体力を消耗しやすいため、夏場の糖力アップが有効です。 猛暑が続く場合は、市販のクエン酸を2000倍希釈を、別途潅水し、体力消耗を防ぐ。収穫最盛期は十分潅水し、日中換気を行い、葉焼けに注意する。 病害等ではなく、アレロパシーの蓄積による連作障害が見受けられる場合は、マジ鉄200gを混用して潅水する。
水害・湿害発生時	応急対策	酸素供給材 菌力アップ	規定量 10リットル	潅水 潅水2回	大雨水害等により冠水した場合は、MOXなどの酸素供給材を速やかに潅水し、翌日菌力アップ10L（50倍希釈）で潅水する。3日後、再度菌力アップ10L（50倍希釈）を潅水する。
病害虫 発生時	土壌病害の対応	菌力アップ 本気Ca（マジカル）	10リットル 2kg	潅水（水1トン） 5日おき4回以上	立枯病、株腐病、茎枯病は、必ず初期症状で発見し対応する。殺菌剤等を使用したのち、菌力アップ、本気Caで病害の蔓延・拡大のリスクに対応する。
	茎葉病害、 虫害の対応	本気Ca（マジカル） コーソゴールド マジ鉄	1kg 3kg 200g	潅水（水1～2トン） 5日おき4回程度	葉面散布でも良いです。その場合は、本気Ca（マジカル）は2000倍希釈、コーソゴールドは500倍希釈、マジ鉄は5000倍希釈。細胞壁や繊維を強化し、光合成や免疫の活性を高め、耐病性を高めます。日照不足時には、予防的に散布します。
刈り取り 1か月前	貯蔵根発達	コーソゴールド 本気Ca（マジカル）	500倍希釈 2000倍希釈	潅水または葉面散布 5日おき4回	リン酸、カリ、カルシウムを施用し、貯蔵根の発達を促します。 貯蔵根の糖度はBRIX20～25度を目指します。

※地域、作型によって、時期が異なると思いますので、生育ステージで判断してください。

※土壌診断を実施し、データに基づいて施肥設計を行うことをお勧めします。品種や土壌条件等によって、施肥量は加減してください。